

臨床検査技師の未来デザインと可能性

—7万人でないとできない仕事—

一般社団法人日本臨床衛生検査技師会
代表理事会長 宮島喜文

はじめに

足掛け12年の年月を日臨技の会長として務めてきたが、その間に自分でも予期せぬ出来事に遭遇し、その都度、様々な事象に対応する等貴重な経験ができた。3年にもおよぶ新型コロナウイルス感染症のパンデミック、熊本地震・能登半島地震の発生など危機管理や自然災害への対応を始め、2度のIFBLS学会の国内招致、参議院議員となり国政に参加できたことなど様々な経験をしたが、歩んだ道は決して平坦ではなく波乱万丈であった。

会長就任より常に一貫して「臨床検査技師にとって、より良い未来を創りたい」という思いで、会員個人、技師会という組織として一体何ができるのか、常に自問自答の毎日でもあった。

誰しも「何かしなければ」と思っている、何を指すか思い描けずに漫然と日々を送る人や目の前の家庭や仕事に追われ、深く考える暇さえないという人もいる。しかし、近年の自然災害や国際紛争、そして進歩著しい科学技術の発展、人口減少の加速、働き方も変わっていくなかで、わたしたち臨床検査技師の未来には“不確か”なことが増えているのも事実である。そして、自分の将来に漠然とした不安を感じる会員も少なくないだろう。

未来をデザインするための個人の感性を磨く

日臨技は会員のために、政策実現を通じて臨床検査技師の職域を確保し、専門技術職として職能が発揮できる資質向上をサポートする職能団体である。

そして、今日この難しい時代を生き延びるべく希望の持てる臨床検査技師の未来の道筋を考え、様々な事業を展開してきた。例えば、臨床検査技師の法律を改正し、検体採取やタスクシフト/シェア、精度管理の実施、従来の測定・分析の工程から検査行為の前後と付随する行為までを職務範囲として拡大してきた。

その結果、確かに“検査室での独立性”を唱えることは無くなり、救急外来や病棟、手術室や内視鏡室などで診療の流れの中で活躍する臨床検査技師の姿が次第に形成されてきている。

しかし、人口減少が進む2040年には我が国の社会構造も大きく変化し、今とは違う社会が訪れると予測されているが、確かな未来が見えている訳では無い。しかし、現実には着実に今日も未来に向けて進んでいる以上、自ら仕事に誇りを持ち生活を豊かにするためにも未来社会の到来を可能な限り予測し、先取し私達の未来を創って行くことが必要ではない

第73回日本医学検査学会（金沢）

会長基調講演

か。

これまでの、長い経験で培った知識や技術で未来を想定し、新たな道を開くことには限界を感じた。そのため、ここ数年、斬新な発想を期待して若手会員で多様性のある人材を未来構想の策定など様々な事業に参加させながら議論を深めてきた。そこで判明したことはマニュアル化した日常業務で先取性や主体性が失われていることであり、未来をデザインするための感性を研ぎ済まさなくては新しい発想は生まれてこないということである。

臨床検査技師の未来シナリオを思考する

目指す未来は、みな同じではない。そして、それぞれの価値観も異なる。臨床検査技師として「どういった可能性があるのか」未来の展望を考え、今こそ若い人の叡智を結集せねばならない。臨床検査技師が思い描く「臨床検査技師の未来デザインとその可能性」について、現役世代の私達の責務として、未来の若者たちのファシリテーターとして後世に、その足跡を残すことである。

そして、今若者が持っているポテンシャルを引き出せる環境づくりと共に新たなプロジェクトを立ち上げ、未来を考えていく時期に来ている。そこでは、臨床検査というテクノロジーの領域に限らず、社会、経済、政治、環境なども多角的な視点での考察も必要となり、そのための生涯学習も重要である。

7万人でないとできない仕事

日臨技では、創立70周年という年月を重ね臨床検査の発展と臨床検査技師の社会的地位の向上を目指し、今日の臨床検査の礎を築いてきた。時には試行錯誤や厳しい判断を迫られることもあったが、会員の叡智と総力で乗り越え、7万人という仲間・同志が集う医療技術者団体に成長している。この事実こそが未来への道標となるであろう。

現在の社会は情報過多であるが、幅広い知識の習得や多角的な視点で考える機会が少なくなり、標準化や人工知能により結論を出す時代になった。しかし、私達は人との交流やモノとの接触など、その時の感覚が個人の意思決定に繋がっていることを忘れていけない。

日臨技にとっても私達会員にとっても、これからも革新性を求め試行錯誤の積み重ねが未来の臨床検査を創ると信じて進むしかない。一人ではなく7万人もの仲間がいる。